

「私の履歴書（人間万事塞翁が馬）」

内藤 淳 昭和41年卒業（28生）、医療法人社団恵比寿会 理事長

中学3年生の夏、歴史学教諭から「卒論」を課せられた私は、日本史世界史とはかけ離れた「プレートテクトニクス 地殻変動に伴う大陸移動の歴史」を提出した。当然の報いとして、当該教科の内申評価は10段階の1となった。その一方で、整備委員活動のなかで電動床磨機が大得意となり、慕っていた教諭から電動床磨機免許皆伝を口頭で頂き、嬉しくて早朝登校までして床磨きに精を出したりもした。その様な中学時代ではあったが、私の人生の中では最も猛勉強をした時期でもあった。

新宿高校では、小生意気な言い方になるが、全ての教諭が尊敬に値する人物だった。全ての先生方に其々の思い出はあるが、特に地学の豊沢先生のお言葉は心に染みだ。「私達教師と言うものは君たちの人生の一里塚だ。道に迷わないよう要所に立っていて君たちはそれを通り越して先に行くのだ」と。そして、高校2年にもなると多くの一里塚に導かれつつ人生の岐路に差し掛かった。私は早々に医学部受験を決め、親の承諾も得た。親族に医者が多かったこともあり、針路の決断は早かった。しかし、目標を絞ったことによって逃げ道の無いプレッシャーが生じ、受験勉強とクラブ活動を両立させる自信を失った。そして、硬式テニス部を退部した。1年生の時はテニスに没頭しテニスの素晴らしさを心底感じていたのだが、私には受験勉強と部活を両立させる能力がなかった。退部を申し出た時、私は自身の器の小ささを痛感した。だが、結果的に現役で何校かの新設医大には合格し「君が入学を決断してくれたなら必ずや特待生で受け入れる」と満点の数学試験の結果票などを面接で見せられ入学を勧められたところもあった。しかし、結局全てを辞退して一浪し、翌年に第一志望ではなかったが東京医科大学に入学した。

卒後は東京医大第一外科専攻の大学院に進み、肺移植で博士号を取得した。同研究の成果により日本

胸部外科学会の第1回“Young Investigator's Award”を受賞し、総会特別講演の栄誉も得た。その後、肺移植研究班の活動と並行して厚生省密封小線源治療研究班にも加わった。臨床と研究三昧で順風満帆と思われたが、転機は突然に訪れた。上司が次期教授選に落選したのだ。その結果、私の所属していた研究室員のほぼ全員が大学を離れることになった。正に白い巨塔であった。私は大学関連の社会保険蒲田総合病院外科医長に異動となったが、ここでは多くの臨床経験を積むことができた。ところが数年後、またしても転機が訪れた。実家の止むにやまれぬ事情により社会保険病院を退職し、父が新設した分院を任されることとなった。開業医となったことにより、地域医療の大切さや基本診療の重要性を改めて患者さんから教わる事が出来た。そしてこの春、渋谷区医師会改革派の一人として医師会理事に選出された。これからは、医療行政とも係わって行くこととなる。振りかえってみるに「人間万事塞翁が馬」を思う。

現役で新設医大に入学すれば良かったのかと迷うこともあった。また、二浪三浪してでも志望校を挑戦し続けるべきだったと後悔したこともある。しかし、あのときどうすれば良かったのかではなく、これからも前を見ながら歩いていこうと思う。もちろん、夢は追いつけるべきである。しかし、人生は自分だけのものではない。家族や周囲との助け合いの中で共有され育まれていくものであろう。道に迷った時は友人や親兄弟、そして人生の一里塚である教諭と良く相談して欲しい。学生に敵はいない。周りの者全てはライバルにこそなれ敵ではなく味方であり、場合によっては一里塚である。君たちが大いなる夢を持ち続け、そして今後更に前進していくことを期待する。

（朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。）